

『望郷』

柏市 渡会克雄

「終点ですよ」

肩を叩かれて目を開けると、真っ赤な唇。

騒々しくて、いつも私をカリカリさせている女子高生達。

私はダンボのような耳と海のような心が欲しくなった。

——春。

「勤労奉仕で砂をもっこで担いでいたのよ」

そこへ戦闘機が現われて、浜昼顔の咲く砂浜を駆けまわったという。

「戦地では太陽葬や虫葬があった時代よ」と叔母。

——夏。

孫にあげたカルティエの時計の空き箱、

中には蟬の抜け殻と戻って来ない時間が入っていた。

南洋から流れ着いた椰子の実、

話しかけられても言葉がわからない。

——秋

「キヤーー！」と妻の絶叫、

庭にウチの犬の待遇を視察に野犬が来ていた。

朝六時五分、ガザにミサイルが撃ち込まれている。

——冬

何していいようが、どう生きていいようが、

今日も朝が来て、

私の故郷では渚を染めて夕日が沈むのだろう。